

プーチンとロシア世界

法政大学法学部教授 下斗米伸夫



はじめに 「戦争と平和」の狭間で

クリミア併合1周年を記念した本年3月15日ロシアのテレビ番組で、プーチン大統領は1年前のマイダン革命前後の併合に至る経緯を意外に率直に語った。クリミア編入を決定したのは、通常いわれてきた3月6日の安全保障会議の席ではなく、それよりも前の2月21日から23日朝7時にかけての一連の事態のなかであったという。その最終決定の参加者はプーチン大統領やシヨイグ国防相などわずか4名であった。

その経緯はこうだ。2013年末以降、EUとの連携を反故にしてロシア傾斜を強めつつあったヤヌコビッチ大統領

に反対するマイダン広場の抗議運動は暴力化し、1月までに死者がでるにいたった。それでもまだ憲法の枠内での闘争であったように見えた。昨年2月21日には独仏ポーランドの三外相の保障によって憲法改正することに政府と反対派双方が同意したことといったん紛争は終わるかに見えた。

ところがその直後反政府系のなかでも右派セクターなどの民族派的急進派は米政府やNGOの支援をうけてさらに実力で権力奪取の挙に出た。この過程では通常言われてきた政府の治安部隊ではなく、右派民族派のスナイパー部隊が政権警護の治安部隊だけでなく市民をも標的にし、この結果多くの犠牲者が出たことは今では明らかになってきている。

このこともあってヤヌコビッチは右派急進派によるクーデターと自身の殺害を恐れて首都キエフを離れ、ハリコフからクリミアに向かった。この過程で現職の大統領が国内にとどまっているのにトゥルチノフ大統領代行やヤツェニューク首相といった「暫定」政権が議会によって「違法に」、つまりクーデターまがいに作られたというのがロシア側の認識である。逃れる大統領への右派勢力などクーデター政権側の攻撃から救出するため、23日朝7時にはヤヌコビッチ大統領救出とクリミア国民投票の上での併合を決めたとプーチン大統領はいう。

この大統領救出とクリミア併合とはもちろん論理的にはつながる話ではない。その点プーチン氏は「併合が目的なので

はなく、クリミアがドンバスで起きたようなマイダン政権派（ナショナリスト）と親口派の激突を避け、ロシア系が多数をしめる住民の意思を表出させることが目的であった」とテレビで主張した[Rossiya 1 TV (Moscow) March 15, 2015]。ヤヌコビッチはロシア人が多数を占めるクリミアに向かった。そうするとこの地で両派の激突が起こりうる。これを避けるための措置がつまり自決権の擁護である。直ちに密かに世論調査をした結果75パーセントがロシア加盟賛成と出た。プーチンは国防相や特別部隊に指示を出したと、率直にいつているが、この時点で外国への軍隊派遣を行ったことを認めている。さらにプーチン氏はクリミア併合に際しては核使用の可能性に至るまで考えたこの時主張して世界に衝撃を与えた。

プーチン大統領のこの

ウクライナを作ったのは「ソ連」独立により分裂



- ウクライナとはスラブ系の「国境・辺境」の意味
- ポーランド・リトアニア(カトリック)の辺境
- 「新ロシア」はレーニンが編入させる(ドン地域)
- スターリンがロシア帝国にはない「赤いロシア」、ガリツィアを1940年編入、東西対立が構造化
- 1945年ヤルタ会談時クリミアはロシア、これを無理に編入させたフルシチョフ
- スターリン後のフルシチョフからゴルバチョフまでの指導者は軍産複合体を管理
- ソ連崩壊時のペンタゴンと国務省の独立をめぐる論争
- 米加世論の特殊性、西ウクライナ・ポーランド・ロビー
- なぜキッシンジャーがプーチンに同情的か

実に率直な発言内容を触発したのは、ひよっとしたら1月31日にオバマ大統領がウクライナ危機に

関して米国の関与をこれまた率直に認めたCNN発言であったのではないか。そこでオバマ大統領は、ヤヌコビッチ前ウクライナ大統領を追放した権力移動を米政府がブローカーとなり、そしてそのことがプーチンをして即興的なウクライナ併合に導いた、と明かしたのである。

戦争で最初に犠牲になるのは真実だ、という有名な格言があるが、この間諜に遺憾なことに、ロシアだけでなく欧米メディアもまた虚実取り混ぜた「情報戦争」の担い手になってきた。ほとんど注

目されていないが、米国最高首脳もまたウクライナ危機の最大の論点であった米政府の2月政変への関与をあっさり明らかにした。プーチンもクーデターまではクリミア計画は一切なかったと断定した。実はこの頃から欧米主要メディア、たとえばBBCでも2月革命に右派が関与、特定できないスナイパーたちが右派セクター関係者であることをうかがわせる内容が出始めていた。昨年3月〜4月ぐらいからドイツ公共放送など一部では報じられていた内容だが、英米系の報道も3月31日には欧州評議会の人権委員会がこの問題調査をホイコットしているとウクライナ政府を非難している。1年後になってウクライナ危機の真実が報じるようになって、正義は救われたといえよう。もっともその代償はあまりにも大きい。

ウクライナをめぐる危機はいっそう深刻し、ウクライナ国家を、国家とする、今年2月のミンスクII合意も、米口間の急速な関係悪化が、代理戦争にいたる危機を懸念したメルケル首相などヨーロッパ首脳が動いた成果だ。この国際的な文脈まで理解しないと、核の威嚇をおこなわねながら同時にわざわざプーチンが「キューバにはしない！」ともいった危機

の真相はわからない。

いな、ミンスクでの停戦合意後も米口の関係はいっそう悪化している。双方は公然と中距離核など核配備など危機をおおっている。さすがにオバマ政権も5月にケリー国務長官を2年ぶりにソチでプーチン大統領と会談させ、危機回避に動き出した。8月末にはラブロフとケリーとの外相級会談が予定され、ネオコン系のヌーランド国務次官までもが危機回避に動いていることは「戦争と平和」をめぐる世界政治の深刻さを物語っている。さらに底なしに広がった中東危機、イラン紛争での国際的和解などもこのような文脈で理解しないとわかりにくい。

1 プーチンとは誰か

そういった国際危機の中で最も重要なプレーヤーとなっているのがロシアのプーチンだ。筆者も出席した2014年10月のバルダイ会議で、あるロシア政府高官は「プーチンなくしてロシアはない」と発言して内外に波紋を呼んだ。ところがこのプーチンの背景や実像は世界のメディアの上でも「ヒトラー」に擬せられているが、東独滞在だったKGB出の政治家という扱いだけでは、あまりに

不十分であろう。

というのもウラジーミル・プーチンの素顔に迫るいくつかの新しい素材が国内で出ている。プーチン自身は自分の一族がモスクワから120キロほど北西のトゥベリ州の農民出であるということ、を昨秋バルダイ会議で語った。実際この地は、かつてでたソ連最初の国家元首で農民出の革命家カリーニンにちなんで、カリーニン州といわれたこともある。この州のトゥルギノこそ、17世紀プーチン一族が起きた地域の発祥地である。同時に同地は正教の中の異端派古儀式派の根拠地、カリーニンもそうだったと言われる。

有名人には多くの親戚が生まれると言うが、ロシアも同様だ。今や全ロシアで3000名いるとされるプーチン氏の一族の系譜を調べたのは、アレクサンダー・プーチン氏、大統領にとっては遠縁に当たる。このことをはじめたのは1986年、つまりペレストロイカ改革が始まったところで、自己のルーツを尋ねだした。もちろん将来のロシア指導者は無名のKGB将校として東独ドレスデンで活動していた頃である。ロシア語で祖国(ロージナ)はロド(氏族)に由来する言葉だが、20世紀の激動のなかで、一族

の「過去」を尋ねることはソ連時代にはタブーであった。ペレストロイカの自由な雰囲気、このような祖先探しを可能にした。親戚の古老への聞き書きや州文書館を中心にこの探索の活動が開始された。

トゥベリはモスクワの扉(ドゥベリ)ということわざがあるが、そのトゥベリ州文書館でも1999年から調査した。大統領の祖父スピリドンが1880年生まれ、晩年レーニン家のコックでもあったことはプーチンの最初の回想にも出ている有名な事実だ。彼の6代前のシメオン・フォードロビッチ・プーチン(1723年生まれ)がプーチン家の祖であることが確かめられたとアレクサンドルは指摘している(Aleksandr Putin, Rod Presidenta Putina, 2013)。つまりプーチン氏から8代前である。もっともロシア国立古法律文書館はさらにその2代前の祖1649年前のファディ・ヤキモビッチ・プーチンを特定したという。祖先がトゥルギノ村に移住したのは1758〜63年の間の間である。

このように日本の庶民よりもロシアの普通の農民が一族の祖を10代にもわたってたどれることに驚く。もっとも有力政治家の祖の探索に中央、地方文書館が躍

起となった感がなくもないが。一つには、戸籍管理は革命前は教会が行っており、そして革命後は「宗教はあへん」という無神論政権のおかげで国家権力が教会資料を(多くは)隔離して保管したという逆説がある。ソ連崩壊後、ロシアは過去を取り戻す。

革命前アストリア・ホテルのcockであった祖父スピリドンは首都サンクトに叔父の世話で仕事の縁を得たという。故郷の教会で結婚をしたことが1907年2月の文書に残されている。彼らは日露戦争後起きた1905年の農民運動には参加していない。このレストランでよく食事をしていたのがロシア革命時にロマノフ家を引っかけ回した怪僧ラスプーチンであった。祖父は気に入られ、金貨を与えられたともいう。ちなみにそのラスプーチン一族、革命後は不名誉な名前を嫌ってプーチン姓に改称したという。

1917年前後に祖父スピリドンは4人の子をもうけた。しかしロシア革命でレストランは閉鎖された。それどころか革命後200万の都市住民は飢餓に苦しみ、都市は崩壊しかけたが、出稼ぎとして農村に家を持っていた祖父はトゥベリに戻っている。大統領の父ウラジーミル・スピリドノビッチは出稼農出のcock

クの子として1911年に当時の首都サンクト・ペテルブルクで生まれた。他方、プーチンの母マリア・イワノブナはこの3キロ先の村の中農の家で1911年生まれた。プーチン大統領自身は両親が41歳の1952年10月9日に生まれた。この間大祖国戦争という大戦期、父は1941年に戦線に参加している。母は包囲と飢餓の同市にとどまったが、飢餓の42年に現大統領の兄姉に当たる子どもたちはなくなった。もっとも母はこのことを語らなかつたという。苛烈な状況下共同墓地に葬られた。戦勝70周年の今年、赤の広場での記念日でプーチン大統領もいまだ墓のゆくえもしれぬ兄の写真をかざした。

もっとも祖父がレーニン家と関係があったからといって一族が特に革命派だとか親政府系であった訳ではない。それどころかボリシェビキ権力が独裁をしいた革命期、居酒屋を首都でやっていた叔父は射殺されている。それでも一時故郷の農村に戻った祖父は、1920年代初めテロを恐れて郊外に住んだレーニン首相の一家にcockとして雇われる。このことをアレクサンドルは触れてないが、それはプーチン首相が大統領候補として選挙向けに書いた文書『第一人称』で触

れられている。もっともこの本の日本訳『プーチン、自らを語る』(扶桑社、2000年)は英訳本からの重訳だが、英訳者が別荘の場所を間違えた。このためにこの別荘がレーニンスキエ・ゴルキという古儀式派村の中心にあって、サツバ・モロゾフという20世紀当初の古儀式派系大資本家の別荘に住んだということの文脈がわからなくなった(下斗米『歴史に消されたもの達』河出書房新社、2013年)。無神論者のレーニンはともかく、cockの祖父プーチン氏も古儀式派とはいえないようだ。

他方祖母はしばらく夫と離れて1930年の自分の村でスターリンの進めた集団化には積極的に関与していたようだ。ちなみに官僚は間違えて彼女の名前をプーチンと記載したため、晩年になって年金を打ち切られかけた。しかし30年代に共産党系施設の料理人となっていた夫に招かれてモスクワで暮らすことになった。大祖国戦争では大統領の叔父に当たる3人の息子が戦死している。ミハイルは33歳(1941)、アレクセイはクルスク戦(1943)、妹アンナの夫等である。もっとも大統領の父は傷病で復帰してきた。戦後父はイリンスコエのモスクワ市委員会の寮のまかないcock

となった。母も文部大臣フルツェワの縁故を得て、年金問題を処理してもらったという。母は故地との関係を絶やさなかったというが、それでも彼女の家は地方権力によってほしのままにされた。祖父は1965年85歳でなくなった。祖母も1976年90歳だった。復員していた父は当時エゴフ車両工場で働き職場の党の役職でもあった。比較的長命な一族だが、母は1997年に、父は1999年にそれぞれ他界した。

この一族の記録でおもしろいのは1770年代頃のペストの発生とプーチン一族の一部がボルガに移住したことである。プーチン一族は17世紀以降ボルガへの移住政策にのった結果、ニジニ・ノブゴロドに親戚があった。アレクサンドル氏ははつきりとは書いていないが、トゥベリーは伝統的な、今の言葉で言えば原理主義的な正教地域であった。彼らはカトリックと和解するというロシア帝国が強化した宗教改革には賛成でなかった。宗教弾圧もあった。こうして18世紀末、弾圧とペストに対抗して、ボルガ沿岸に移住したがプーチン一族も例外でなかったようだ。ちなみに祖父スピリドンは1920年代にボルガで漁労をやっていた遠縁のプーチン一族とも会っていたが、

この人たちは古儀式派であった。なかでもペルミ州のプーチン一族は、ストレリコフの反乱に荷担した射手出身の古儀式派であったと古老たちは伝えた(同書170)。ウラルに行った遠縁は古儀式派のプーチノ村を作ったともいう)。1908年の古儀式派カレンダーにも出てくるウラル商人アンドレイ・プーチンはその一族であるようだ。20世紀はじめ、短期だったが栄えたストルイピン改革など資本主義の担い手でもあった。1917年の革命を支持しなかったこの村のプーチン一族はボリシェビキ権力の抑圧にあったが、全ての一族を根絶やしにできないとわかった革命権力は離反者を作った。なんとスターリンの医療担当だったヨシフ・プーチン中佐はその代表であるという。

1995年の人口調査によれば、ロシア連邦でプーチン姓が多いのが、アストラハン、ボログダ、ペルミ、サラトフ、サンクト・ペテルブルクであるという。今でもインターネットで検索すればプーチン姓が圧倒的に多いのがペルミなどボルガ沿岸で、これらでは古儀式派の影響がある地域である。一族の出自となったトゥベリー州よりも多い計算になるそうだ(同書179)。つまり大統領の一族

は発祥の地トゥベリーからボルガ沿岸に拡散し、一部は古儀式派的影響下にあることを物語る。

筆者がプーチン大統領と古儀式派の問題に引かれたのは古儀式派系の民族派政治学者アレクサンドル・ドゥーギン氏から、この関係を聞いたからだ。なかでもソ連期の古儀式派イコン画の作者のサラトフ出のアンナ・プーチナ(1918(1990)のことを大統領は遠縁と評したことがある。彼女の祖父は1930年に宗教上の理由でソ連権力から弾圧された経験があるという。アンナもロシア帝国もソ連も否定した古儀式派らしく、ソ連国家からは一切年金を受け取らなかったという。

2 プーチンの保守主義

ソ連崩壊前後からロシアの政治家をはかる指標としては市場経済と政治的民主化を尺度として保守派と改革派という基準で議論することが多かった。しかしプーチンの政治的立ち位置を考えると場合、これまでのロシア政治についての移行論的発想を捨て、このように過去のロシアの古層が次第によみがえるという意味で保守的ロシアを考える必要がある

う。

この議論は21世紀のプーチン政治を考
えるときますます基準に合わなくなっ
ている。というのも民主的革新派なるもの
が21世紀始め前後オリガルフ政治家の隠
れ蓑となり、人気を落とし、そしてつい
にはマージナル化されたからである。他
方で市場を拒否する頑迷な保守派なるも
のも意味をなさなくなった。多くのノメ
ンクラトゥーラ官僚たちも実に市場経済で
は適応が早く、克つ強欲ですらあったこ
とは中国と同様だ。

かわって現れた基準として、保守軸を
含む三次元で考察する必要が出てきたの
は、とくにタンDEM体制から2012年
選挙をうけて再度プーチンが大統領とな
り、保守の基準を鮮明にしてからであ
る。とりわけ、2011年から12年にか
けての大統領選挙をめぐる亀裂のなか
で、ロシア・エリートはなかに大統領領
プーチンの保守主義と首相メドベージェ
フのやや自由主義的発想との間に相対的
な分岐すら生じた。前者のなかでは、そ
れまでのパブロフスキーやユルゲンスと
いったリベラル派が影響を失った。それ
らを束ねていたチェチェン系ともいわれ
るスルコフ第1副長官が2011年末解
任され、しばらく影響を低下させた。ス

ルコフはその後メドベージェフ首相の下
で副首相、官房長であったが、13年に
なつて再度解任された。9月には一説に
はチェチェンのカドイロフ大統領の取り
なしで13年9月から大統領補佐官として
復活している。もっともウクライナ問題
では当初は、タカ派の政治家・経済学者
セルゲイ・グラジェフに見劣りした。し
かしミンスク合意過程では彼の立場はや
や目立っている。

かわって後者を支援したのはセルゲ
イ・イワノフらであつて、かれらが大き
統領のイデオロギー部門での影響を握つ
た。とくにサラトフ出の政治学者から国
会議員として統一ロシア党をつくった第
1長官ボロジンらの影響力が増大した。
2014年彼らが影響を頼りとしたのは
イズボルスキー・クラブであつて、イズ
ボルスキー・クラブは、名づけての保守
派、とくに1969年の中ソ対立で著名
になつたジャーナリストのアレクサンド
ル・プロハノフ、古儀式派の影響もある
アレクサンドル・ドゥーギン、そしてか
つて改革派で、プーチン大統領三選運動
で著名となつた元『独立新聞』編集長の
ビターリー・トレチャコフら、帝國的保
守派とでも言うべき潮流の論者を含んで
いる。なかでも彼らが主導した新しい問

題は「新ロシア」企画である。つまり帝
政ロシア時にロシア領であつたウクライ
ナ・東部南部へのでこ入れであつて、ウ
クライナの中に半独立領域を作る企画で
あつた。反対派的な『独立新聞』のコン
スタンチン・レムチューク編集長はこの
企画を「赤・正教企画」であると喝破し
たが、たしかに共産主義、大国主義と正
教との結びつきを見ているとそう言えな
くもない。

イズボルスキー・クラブは2012年
9月、つまりプーチン2になつて作家ア
レクサンドル・プロハノフらが中心に
なつて作られた。背景には軍事産業担当
のロゴジンがあるといわれる。同人に
は経済学者でクリミア関与をすすめたグ
ラジェフやKRO系のナターリヤ・ナロ
チニツカヤ（パリへの文化大使）、経済
学者ミハイル・デリャーギン、そして評
論家のミハイル・シェフチェンコらがい
る。しかしリベラル派の推測では同派が
プラグマテックなプーチン大統領自身に
影響力があるとは思えない。実際彼らが
主導したと考えられるドネツク人民共和
国はその憲法案で正教国家建設を掲げ
た。A・ボロダイ前首相は正教系オリガ
ルフのマラフェーエフの支援を受けた政
治テクノロジストであつた。新ロシアと

いう企画は、しかし7月末までにウクライナ軍の「反テロ政策」でスラビャンスクを放棄するなど座礁に乗り上げ、責任をとって8月にストレルコフ国防相とともに辞任した(下斗米2014..87)。

いずれもクレムリン系保守派政治学者セルゲイ・クルギニャンの説得でロシアに引き揚げ、ウクライナ人のA・ザハルチェンコらに代わった。

「新ロシア」イデオロギーについては民族派のプロハノフの編集する『ザフトラ』紙などで詳しく展開されている。これらの著作では、正教こそ「ロシア世界の基盤」であるが、しかし実際には、ウクライナを二つに分断することへの危惧も率直に表明されている [Zavtra, No. 38, 2014]。他方では「単一ウクライナ」が、ロシアとの永久の紛争になることから、ウクライナはもはや存在しておらず、したがってそれについて語るのをやめるべきだ、存在するのは「新ロシア、小ロシア、そしてガリツィアだ」、ロシアにすむのを嫌うものは「リポフからテルノポリ」あたりにすむべきだ、と語る論客もある(パーベル・グバリョフ)。

ウクライナがユーゴスラビアのように解体していると2015年夏に主張したのハリベラルなメドベージェフ首相だ。

プーチンは2度目に首相であった時、歴史書を読みあさったようである。その際、ロシア革命に否定的だったリベラル民族派の哲学者、思想家ベルジャーエフやイリーンのような人々を読んだ。反共リベラル、穏健民族派の彼らの思想は、実は1960年代半ばにコムソモールの研究会では読まれていたようで、ペレストロイカを準備した知識人はこの基調で動いていた。特にベルジャーエフが最近の大統領府の旗頭になった観がある。

これに対し、より正統的な「正教的チエキスト」と呼ばれるようなプーチン主流派が存在する。プーチン自身は、また正教会に通ったといわれる。とくにチホン・シェフクノフ神学校長との関係ができ彼を尊敬している。後者は映像画家としての経歴もあり「帝国の終焉」で、東ローマ帝国崩壊の理由をオスマン・トルコだけでなく、カトリックにも責任を着せたといい「V. Trenin, Russia porvala s odnoipoljarnoi sistemoi: pobuditelnye motivy politiki Putina, 2015, Marta, 10」。

現代ロシアでカトリックとは、16世紀末の「偽ドミトリー」「ボリス・ゴドゥノフ」の事件を待つまでもなく、新興モスクワにとって、カトリックのリトアニア、ポーランドはライバルでもあった。ちなみに、プーチンが大統領になってからそれまでの11月7日の革命記念日を正式に廃し、かわって4日を国民の休日としたが、その日はポーランド、リトアニアからクレムリンを取り戻した肉屋のミーニンやボジャルスキーら「国民義勇軍」のもとで1612年にロマノフ王朝が生まれることになった記念日である。(ちなみにプーチンはミーニンをタタール人と言っている)。反カトリック的義勇軍の歴史は今に始まったことではない、とプーチン時代は強まっている。

プーチン周辺にはこうして彼の周りにロシア・アトス教会(コンスタンチン・ゴロシヤポフ)とか、帝国パレスチナ正教協会(元首相セルゲイ・ステパシン)、あるいはヤクーニン(鉄道)やバイダコフ(ミレニアム銀行)らが属する聖アンドリュー使徒基金といった正教系NGOがある。これら正教会の中核こそむしろプーチン大統領が依拠する装置となっている。

プーチン周辺をこのような一枚岩の組織とみるのも当を得ない。これに対し民族少数派出身の国防相ショイグやスルコフらは、正教的なロシア主義のアイデンティティはもっていない。このためマロ

フェーエフ系のストレルコフ（ギンジン）などが推進して失敗した「ノボロシヤ」へは批判的ともいわれた。カドイロフにおいていたとの指摘もある。彼らはいずれもキエフとの停戦合意に熱心であった。そのショイグが、今年5月9日戦勝70周年軍事パレードに際し、十字をきるところからパレードを始めたことはちょっとした話題となった。ソ連時代は多く無神論権力の元で密かに十字を切るしかなかったロシア兵たちは初めて仏教徒と言われる少数民族出の国防大臣のもとでおおっぴらに十字がされることになった。

もっともプーチンは同時にユダヤ教や、イスラムとの接触にもたいへん熱心であって、特にイスラムとの接点を求めていることには注意しなければならぬ。

このような大統領府のイデオロギーを担当するのは先に触れた第1副長官であった。政治学者の油本真理は、このボロジンについて、サラトフ州で親エリツイン系、一説には後継説もあったアヤツコフ系の政治学者だったが、やがてそこから「祖国・全ロシア」系の議員となり、むしろプーチン支持の統一系と対立していたことを明らかにした。もっとも

2003年にはそれがプーチン与党の統一ロシアに関係していたことも示した（油本真理『現代ロシアの政治変容と地方』、東大出版会、2015年、157ページ）。

もっとも油本は指摘していないが、この地方の政治過程を全国規模で見ているのが1996年に大統領府に入り、統制管理局長GKUとして地方政治担当だったプーチンであったこと、そして、エリツインの病状悪化とともに、後継者争いがこのアヤツコフ、近隣のニジニ・ノブゴロドから出てきたネムツォフ、「祖国」が押すプリマコフ、そしてステパーシンとプーチンとで戦われたことである。プーチン支持派の「統一」にとって、プリマコフ派の祖国との統合は好ましい相手であった。ちなみにこの頃のボルガでの知事選に、クレムリンとオリガルフがいかに関与したかは『選挙』と言う秀逸な映画が作られている。

このもとでモスクワ大学系の政治学者セルゲイ・バドフスキー（1973）がクレムリン系の内政企画を大統領府で担当していたが、「社会政治経済研究所」所長となった。かれはクリミア併合を1000年の歴史的快挙とした年末の大統領教書の著者の一人であっただろう。ち

なみに前任者のコンスタンチン・コスチンはスルコフ系であったが、大統領府を離れた。最近バドフスキーらはベルジャーエフ研究組織を立ちあげ、穏健宗教民族主義の観点からロシア保守政治をまとめようとしている。この8月半ばにはウラジオストクでこの会議を開くとも言われる。プーチンの東方志向と保守志向とはこうして重なる。

（2015年6月5日・公開フォーラム）

講師略歴（しもとまい のぶお）

北海道札幌市生まれ

1971年東京大学法学部卒業、東京

大学大学院法学部政治研究科修士課程進学

1975年文部省派遣でモスクワ留学

1978年東京大学大学院法学政治学

研究科博士課程修了、法学博士

1988年から法政大学法学部教授